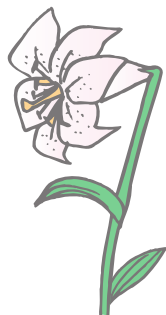


高齢者大学文芸部 7月歌会

紫陽花にひと雨欲しき夕まぐれ水を灌げばあたり
烟らふ 川口 敦子
朱のカンナ窓辺に咲きて今朝もまた老の心を励ま
しくる 氏岡 百枝
雨露を保ちて咲ける紫陽花の地につくほどにたわ
む花あり 安東 綾子
訪ねれば友は留守らし庭の辺の梔子の花に声かけ
帰る 北村 玉恵
思ひ出のこもりし品を捨て切れぬわれの執着いつ
まで続く 中村トメ子
代かきを終へし水面を吹く風の泥のにはひの吾に
はやさし 中津 ツユ
庭先に咲きほこる百合朝夕を夫と楽しむ今日も穏
しく 河津 豊子
夫の風呂やや長ければ幾たびも覗きに行きぬ二人
の生活 中原 光子
今日よりは吾の細事の一つ増ゆ鈴虫漸く生れ出で
たり 梅野かをり
朝日光しみにそそぐ山茶花の一本の緑ととのひ
にけり 岡本 トシ



万句の里俳句会 6月句会

晩年は文机ひとつ新茶汲む 打出 貞
紫蘇揉みて一段落のつきにけり 野中 公枝
薫風に森羅万象目覚め出す 隈部 輝子
薫風やキヤツチボールの親子かな 田島 房子
夏霞故山ことごと包みけり 加藤 妙子
螢火の指揮者居るかに一斉に 北村 妙子
雨を待つ疲れの見えし七変化 平山 邦子
狭庭今やさしくなりし花石榴 宮本 雅子
魚屋に活気ありたる初鯉 林 まつ子
万緑の彼方に浮かぶ阿蘇の嶺 富田 幸子
成長の孫を見つめる運動会 茨木 幸子
ほしいまま山風入れてバンガロー 松永 久子

肥後狂句桜会 例会入選句集より

クラス会 恩師の涙流さした 小川 繁美
変な世の中 いんま地球はたぎり出す 高倉 新米
爺ちゃんの 話相手は植木鉢 須藤 新生
戻り道 磁石のごたる縄のれん 狩野 本六
爺ちゃんの 婆が居らんと夜の明けん 安武 二山
クラス会 来るとはいつも同じ顔 窪田 明徳
耐えきらん 嫁の我慢も限度です 荒木 玄海
焚き割って 人の冷たさ知らされた 田中 孝幸

泗水短歌会 6月詠草

つるばらの紅色映ゆる木戸のみちゆるゆる歩く日
に幾度も 増田久美子
此の日頃庭に見えざる野良の猫今朝は子猫が後従
き通る 大島 きと
三輪車漕ぐを覚えて二才児は夕暮れまでも車はな
さず 平嶋きくえ
夕暮れの空を南へ行く飛行機よ誰かの旅の終りと
ならむ 宮本 峯子
探し啼く猫を抱きて「じいちゃん死んだ」と悟
す日に幾度も 長尾はるみ
紫蘇洗う良き紅ですがに紫大葉が両手を覆う 高藤タツノ
朝な夕鉦を啼らして片たより亡夫にひと刻言葉を
交す 福原美智子
カサブランカ大輪の花咲き匂う娘の思ひとどけと
ばかり匂う 中山 定子
「千の風になつて」を習い唄う時吾もおゝらかに
なりたる気のす 内田つね代

せせらぎ俳句会 6月例会

朝刊の少し重たき梅雨に入る 五丁 義昭
姫百合の深紅を供へ沖縄忌 内村 泊虹
誰も来ぬ一ト日茉莉花よく匂ふ 坂本まつえ
命ぞ宝重し沖縄慰霊の日 藤本 邦治
梅の実の青き音立て塀の外 寺本 和子
新緑の中に真赤な花石榴 藤本アツ子
朝涼し大青田原一望に 内村 鈴子
戴きし胡瓜のとげの痛さかな 服部 静子
底紅の木槿一輪今朝の庭 村山 数恵

肥後狂句水笑会 6月例会

風呂上がり 体重計ば蹴る媽ア 水 光
うつ座り 金比羅さんは駕籠がええ 英 坊
せつこうで 振り込め詐欺にあわしたつ 三 水
せつこうで 犬がかじったアスベスト 三 代
せつこうで 立ったまんまで流し込む 五 女
風呂上がり 風の前からどかん媽 美 由
風呂上がり ビールは兵児の次ですよ 好 茶

七城短歌会 6月詠草

田に急ぐ私の足もと強風に追われ逃げ来し楠落葉
数枚 高木 精
目覚むれば救急車の音近まりぬ気掛る事あり行方
を追うも 池田カツ子
年金で騒げる世間石垣に垂れしホテル袋も揺らぐ 岩津 涼子
取り柄なく経るわれ水引く苗床の稚苗が止むる露 佐々 重弘
玉光る 下川 つぎ
級友が送りくれたる荷を解く手摘みせしとふ茶の
香起ちくる 堀 甲子
縁側に今朝咲く真紅のサボテンを足萎え忘れし 堀 甲子
し立ち見し 堀 甲子
朝餉時窓越し見えて小雀を衡えし鴟は何処へ飛び
立つ 村上 幾雄
葉タバコの花見る散歩も今日までか馴染みの夫婦
がせつせと摘みいる 緒方 寛子
藤棚の真下に座り咲き揃う花の香りに暫く浸る 松岡ミチエ
夕の空長く尾を引く飛行機雲その最果てに学友眠
る 池田 禮子

旭志文芸俳句会 6月詠草

早苗田の水面に浮かぶちぎれ雲 芹川のり子
新緑の上一筋の飛行機雲 郷 ミヤ子
早起きを孫にたのまれ明け易し 水谷 ミネ
携さえて散歩の夫婦菜花道 工藤 房子
紫陽花に一雨欲しや梅雨晴れ間 東 芳子
まゝごとやいたや楓の陰涼し 中尾ヨシコ
半夏生西瓜も畑で出番待つ 出田みどり

